
友情を選びますか？恋愛を選びますか？

美瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友情を選びますか？恋愛を選びますか？

【Nコード】

N9745F

【作者名】

美瑠

【あらすじ】

私には、好きな人がいる。でもその好きな人には彼女がいる。その彼女は私の小さい頃からの親友で・・・？

(前書き)

初投稿なので、あんまり自信はないです。読んでくれると、うれしいです。

「いつてきます。」

今日もいつもの生活が始まる。憂鬱だ。目がさめて、顔を洗って、歯をみがいて、トイレにいつて、朝食を食べ、着替えて家を出る。いつもと変わらない朝だ。そして今、私は最高に憂鬱な時間にいる。家を出て少し歩くと、必ず見たくない人物にあう。それは、私を見るとすぐに駆け寄ってくる。それが、一人でくるなら、ここまで沈んだ気分にはならない。なぜならその人の隣には………

黒木君がいるから。

「おっはよう!!美季!!」

「おはよう。」

私は小林美季。中学2年生。黒木君は私の好きな人。でも、黒木君には友美という彼女がいる。友美は私の小さい頃からの大親友だ。友美は私を信頼してくれてるから、黒木君のことだつてまだ話していない。私は友美が幸せになってくれればそれでいい。私は、ただ、遠くから黒木君を見つめているだけでよかった。そう、今までは………

「ねえ、美季、聞いてるの?」

「ん?あつ!ごめん。聞いてなかった。」

「美季、この頃いつもボーツしてるよね。なんかあったの?」

「なんかあったつて。そりゃ大アリだよ。」

「なんかあったら私にいつてね。」

「言える訳がない。そう思ったら泣きたくなつてきた。」

「ごめん。ちよつと用事あるからまたあとでね。」

「うんでも………」

「またね!」

そう友美と別れて、泣きそうになるのをこらえながら屋上へ行った。私は半日ずつとそこで泣いていた。

帰り道、ここでも隣には友美がいる。友美は別に嫌いじゃない。ただ、友美を見ると、嫌でも黒木君を思い出す。

「ねえ。今日どうしたの？午後の授業、美季出てないじゃん。美季がサボるなんてめずらしいね。」

「そうかな？」

「やっぱりなんかあつたんじゃない？」

「……聞かないで。聞いてほしくない。」

「あつ！そういえば黒木君は？」

「あゝ！！校門に待たせてるんだった！！ごめん美季、先帰ってて。」

「うん。友美！」

「ん？」

「彼氏は大切にね！」

じゃないと私があきらめた意味がない。

「あつたりまえじゃん！じゃあね！」

「また明日！」

そう言つて友美は校門へ戻っていった。

家に帰った私は、何気なく目についたパソコンをいじっていた。

そういえば、こうしてパソコンに触るの、久しぶりだなあ。この頃忙しくてパソコンなんてやってる暇なかった。黒木君のこともあつたし……。いろいろやっているうちに、私は気になるサイトを見つけた。

「何これ。」

ちよつとした好奇心でアクセスしてみたそのサイトは、まさに今の私にぴったりのサイトだった。

「へえ」。話屋か。悩み、書き込みください？心の病院か……

でも、書き込むのはちょっと・・・。」
結局その日はアクセスしただけでおわった。

数日後、友美が黒木君と一緒に前を歩いている。いつもなら、あの端っこに私が一緒にいるはずだった。でも私は断った。友美は友達思いだから、彼氏ができてからも私と一緒に登校していた。もちろん、黒木君も一緒に。でも私にはその場の空気は重すぎた。黒木君が友美に笑いかけるたびに、私の胸はズキツとした。黒木君を見るたびに、胸がとびはねた。私はそこにはいけない存在みたいだった。いや、そこにいてはいけなかった。これ以上一緒に登校していたら、そのうち泣き出してしまいそうだった。もう無理。私はあの日見つけたサイトに助けを求めた。

家に帰ると、私はさっそくあのサイトにアクセスした。そして、書き込んだ。

私には好きな人がいます。それは隣のクラスの男の子。でもその男の子には彼女がいます。その彼女は私の小さい頃からの大親友です。親友は私を信頼してくれているので、まだこのことは話していません。親友と好きな人を見るたび、胸が痛みます。こんな時、私はどうすればよいのでしょうか。

いざ書き込んでみると、だんだん恥ずかしくなってきた。答えはすぐに返ってきた。

自分の心に聞きなさい

「何これ。答えになってないじゃない。」

きつとあなたの心ではもう答えがでているはずです。頭で考えるより、心で感じなさい。そうすれば、きつと答えは見えてくる。あ

なだのしたいことをすればよいのです。

「私の・・・したい・・・こと・・・」

私のしたいこと？私は友美が幸せになってくれればいい・・・
・・・幸せに・・・
違う。それは私が頭で出した
答え。心の答えじゃない。心は・・・私は・・・
どうしたい・・・どう・・・したい・・・？・・・
・・・そうだ・・・私は・・・私は！
そうだ。心の答えはもうとっくにでていたんだ。

次の日、私は友美に黒木君のことを話すことにした。

「あのさあ、友美。」

「ん？なあに？」

「いけ！私！言うんだ！！」

「実はさ、もしかしたら気づいてるかもしれないけど・・・私・・・」

「・・・」

「わかってるよ。」

「・・・えっ？」

まさか、本当に気づいてたの？

「わかってるって。文化祭のことでしょ。」

「いや、違っつて！」

「美季、文化祭の実行委員だからね。悩んでたんですよ。」

だから違う！

「えっと・・・そうじゃなくて・・・」

「大丈夫！こういうのは祭り好きがペアッと盛り上げてくれるから。」

「

「うん・・・」

「よかった。この頃美季元気なかったから・・・」
「いえいえ、理由はほかにあるんですよ。」

「まあ、もうすぐ文化祭だし。元気出してね！」

「ありがとう……と言いたい所だけど、友美……」

「文化祭、二ヶ月後だよ。」

「あり？そうだったけ？」

「……タイミング逃した……」

帰り道、私達の周りには誰もいない。今、私は友美と二人きり。

黒木君は部活でいない。これはチャンスだ。

「ねえ、友美。」

「なあに？」

「今度こそ！いけ！私！」

「実は私……」

「うん。知ってるよ。」

「……何？今度は何を言い出すの？」

「黒木君のことでしょ。」

「私は耳を疑った。友美が知っていたなんて……」

「……いつから知ってたの？」

「前から気がついてたけど、気のせいだと思ってた……本当だったんだね。」

そのときの友美の顔は、悲しいような、寂しいような笑顔だった。胸の奥がチクツと痛んだ。

「やっぱり私達って気が合うんだね。まさか好きな人まで一緒だったなんて……。笑っちゃうよね。」

「……」

少しの沈黙。

「でもね、私、友美と黒木君の仲を邪魔したりはしない。でも、友美にだけは、この気持ち、伝えておこうと思って……。」

「ねえ、ちょっと運試ししてみない？」

「え？」

そういうと、友美はポケットからコインを取り出した。

「私がこのコインを手の中に隠すから、美季はどっちにコインがはいつてるか当てるの。簡単でしょ。」

「うん……」

「もし、外れたら私の勝ち。黒木君は私とこのままつきあい続ける。で、当たったら美季のかち。」

「それで……私が勝ったら？」

「美季はこれから黒木君に会いに行つて告白する。」

「……そしたら、友美はどうするの？」

「いさぎよく負けを認めて、黒木君と別れる。」

「えっ！でも……」

「いいのよ。私が勝つ確率は二分の一。美季が勝つ確率も二分の一。どっちが負けても文句ないでしょ。」

でも……私、いいのかな。こんな、友美から黒木君を奪うなんて……私には……

「できない。」

「どうして？」

「だってこれじゃあ私が勝ったら友美から黒木君を奪つたみたいじゃない。私、そんなの……」

「バーカ。私が負けて黒木君と別れることになっても、私は奪われたなんて思わないし、うらんだりもしない。いさぎよく、負けを認めるわ。」

「さあ、はじめましょ。」

今、私の前には2つの拳がある。片方にはコインが入っていて、もう片方は空っぽ。ここで、運命が決まる……

「……右。」

友美がゆっくり右の手を開く。するとそこには……

コインがのつていた。

「……美季の勝ち。ほら、いきなよ。告白するんでしょ。」

「でも……」

「ほら、つべこべ言わずにさっさと行く！」

私の目から涙があふれた。

「ほら。」

友美に言われて、私は走り出した。

「ごめん。ごめんね、友美。」

残された知美は左の手を開けた。そこにはもう一つのコインがのつていた。

「本当。バカだな、私……」

私は走った。泣きながら走った。多分黒木君は放課後、いつも音楽室で自分のクラリネットを吹いているはず。私はいつもそれを聞くために、放課後、図書室に通っていた。私が黒木君とつきあうことになったら、そんなこともなくなってしまうのだろうか。友美とも、仲良くやっていけなくなるのだろうか……。そう考えると怖くなってきた。でも、せつかく友美がつくってくれた大事なチャンス。見逃すのは友美にも悪い。

「ついた……」

全速力走ってきた私は、息をきらせながら、音楽室へ向かった。

私は今、図書室にいる。図書室には、黒木君の奏でる優しい旋律が響いている。私は、黒木君の演奏が終わるのを待っていた。演奏しているのに私が入ったら邪魔だろうし、黒木君に悪い。音楽室は図書室の隣だ。今日も、黒木君の演奏は完璧だ。一つのミスもない。もうすぐ……。もうすぐ終わる。私は図書室を出て、音楽室へと向かった。

演奏が終わった。私は音楽室の前で一つ、大きく深呼吸をすると、音楽室のドアを開けた。

「黒木君！」

一瞬、黒木君は驚いたみたいだった。

「あっ……小林さん。」

「今日の演奏も、すごくよかったよ。」

「うん。ありがとう……。」

「黒木君、放課後いつもここでクラリネット吹いてるよね。」

「うん。そうだけど……。」

「私ね、いつも図書室にいるの。」

「あ、そうだったんだ。」

黒木君の表情が少し変わった。さあ、いけ！美季！！友美のためにも、自分のためにも、さあ、告白するんだ！今！

「実はね、私、前からずっと黒木君のこと……好きなの。でも友美がいあから、なかなかいい出せなくて……でも、ずっと我慢することも、黒木君のこと忘れることもできなくて、一度、黒木君と正面から向き合ってみようと思って、今日、ここに来たの。別に、ふってくれたっていい。ただ、伝えただけだから。返事もいらない。だから……。」

その先の言葉が見つからなくて、私は音楽室を飛び出した。

とうとう、私は告白した。これでいい。ふられたっていい。これで、私はたくさんさんの勇気をつかった。もう悔いはない。これで私は、恋愛のスタート地点に立つことができたのだから……。

「小林さん！！」

後ろから腕をつかまれた。振り返ると、そこには肩で息をしている黒木君がいた。

「こっ小林さん……けっこう足……速いんだね……。」

「どうして？どうして……。」

「僕、友美と別れたんだ。」

「……え？」

「正確に言つとふられた、かな。実は僕も・・・」

黒木君は全てを話してくれた。友美がいるのに、その横で控えめに笑う私が気になっていたこと。自分の中で、私の存在がだんだん大きくなってしまったこと。友美もそれには気がついていていたこと・・・。

「僕、うれしかった。小林さんも、僕と同じ気持ちだったなんて。でも、いきなり飛び出していつちゃったから、少し焦った。」

そういつて苦笑する黒木君。

「僕も、小林さんと同じ気持ちだよ。だから・・・その、僕と・・・」

黒木君が赤くなってる。なんかかわいい。黒木君を見ていたら、なんかどうでもよくなってきた。

「僕と・・・」

「ありがとう。黒木君、私と、つきあつて。」

その後、私達は少しだけ変わった。黒木君は友美と別れ、私とつきあっている。私と友美は、何事もなかったかのように、前とかわらない。友美と黒木君が別れてしまったのは、私のせいだけど、後悔はしていない。だって、私は、今まで恋をしても、何もせずに終わっていたけれど、今回のことで、やっと私は恋愛のスタート地点に立てたから。

私は、恋愛を選んだ。あなたは、

友情を選びますか？恋愛を選びますか？

終わり

(後書き)

読んでくれてありがとうございます！感想とかいただけるとうれ
しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9745f/>

友情を選びますか？恋愛を選びますか？

2011年4月23日21時22分発行